



ニッポン ドクター和の 臨終図巻

コロナが収束したかと思えば、世の中は衆院選一色ですね。「コロナ怖い怖い」と悪戯に煽っていたメディアの関心が政治に行き、国民も過度な不安を抱えなくて済むのではと、医者として少しホッとしています…。

今回の選挙、男性有権者だからこそ意識しなければと思うのが、ジェンダー問題です。

今回は、男女同数の候補者の擁立を促す〈政治分野における男女共同参画推進法〉が施行されてから初めての衆院選。それでも立候補者1051人のうち、女性候補者は186人と、全体の17%に留まるそう。現在、わが国の女性国会議員の数は193カ国中166位。社会全体を見渡しても、女性管

228 女性初の官房長官 森山真弓



長尾和宏 (ながお・かずひろ) 医学博士。東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る」総合診療を目指す。この連載が『平成臨終図巻』として単行本化され、好評発売中。関西国際大学客員教授。

山真弓さんが、10月14日に都内で亡くなりました。享年93。死因は、老衰との発表です。
福祉ジャーナリストの浅川澄一氏によると、コロナ禍においても「老衰死」は増え続けているそうです。なぜか。病院で亡くなる場合、死因には肺炎、心疾患など病名が付きます。まだまだ多くの大病院

死因は大病院が書かない「老衰」

つまり、コロナ禍で老衰死が増えたのは、「病院は感染リスクが怖い」「面会ができない」といった理由から、在宅での最期を過ごす人が増えているから…どうりで僕は、忙しいわけです。

では、コロナが収束したら「老衰死」は再び減るでしょうか？

僕はそうは思いません。高齢者の多くは最後、肺炎もしくは誤嚥性肺炎で亡くなりますが、「死因は肺炎」と書かれるのを嫌がる家族が増えているからです。「肺炎だとコロナと誤解されそうなので、老衰でお願いできませんか」と。ですから今後、病院の死でも「老衰死」のケースが増えてくると予測します。

死をめぐる問題に関心を持ってくれるのは圧倒的に女性です。男性のほとんどは死を考えるのが怖いのです。

終末期医療の議論を活発化するために、森山さんのような女性議員が増えてくれることを願っています。

命を最後まで使った大往生